
転生ルーレット番外編

秋葉 節子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生ルーレット番外編

【Nコード】

N8827R

【作者名】

秋葉 節子

【あらすじ】

転生ルーレットの番外編となります。

カリブス国所属の歴史学者の研究日誌1

【カリブス王家＜カリブス家の起源＞】

カリブス国は人間が文化を持ち始めて、最初の国家だ。

そして、この国の歴史は多くの謎に包まれている。

分かっている事はこの国が出来る影では、最古の職業と呼ばれる＜メンバー＞や、世界で初めての文字＜ひらがな＞や＜カタカナ＞はこの国で生まれた。

また、他にも鉄器類の武器も、カリブス国が最初に作られたと言われている。

一体どうやってその技術が生まれたのか。

カリブス国が建国し数百年が経つが未だにその謎は解明されていない。

カリブス国を語るにはまず、王族であるカリブス家について語ろうと思う。

王族である、カリブス家の代々たる頭首はどの人物も色々な物を作っていた。

メンバーを多く広め、国の領土を広めたと言われる、ロッキンカリブス。

要塞都市の原型を作りだした、レギンンカリブス。

未開拓地であった、現シャウトール領を発見した、リバルドンカリブス

東に位置する大河にて、漁業を考案した、シャーニッドⅡカリブス
大国カリブスを建国した初代国王、リガードⅡカリブス。

北の亜人族が暮らす、地域を発見した、5代目国王、アルガⅡカリブス。

親衛騎士団を結成し世界最強と言われた8代目国王の王弟初代騎士
団長、オルバⅡカリブス。

そして、戦争時、国の守護者と呼ばれ、帝国からは笑う子も泣きだ
すと言われた12代目国王、マッドⅡカリブス。

有名な人物はこれだけ居るが、実は他にもカリブス家はとても優秀
な人物が多く存在した。

そして、一番謎に包まれた人物をあげよう。

名はレキⅡカリブス。

カリブス家の原初の人物と呼ばれる

彼の出生等は謎につつまれている。

一説には彼が文字を作り、ギルドを作った。

そして、何よりも製鉄技術を作ったと言われている。

後に語る、カリブス家の宝剣を作り出したのも彼ではないかと言わ
れている。

しかし、それについては多くの謎につつまれている。

今でもカリブス家の製鉄技術は世界一と言われている。

彼について謎は本当に多すぎる。

カリブス家の中でも一番謎が多いと言っても過言ではないだろう。彼が生きている時代に、ギルドや製鉄技術、文字、家名等の文化。それと、数多くの料理等も彼が考案しているといわれている。

また、文字に関しても、彼は当時紙がなかった。

今でも紙という存在はとても高価ではあるが。

その紙がないために、彼は木炭と木を削った板切れで文字を広めたと言われている。

今でも木簡と呼ばれる板に文字を書くのが主流だ。

レキⅡカリブスがその原型を作ったと言う説がある。

一体レキⅡカリブスとは何者なんだろうか。

一学者である私自身でさえ興味が尽きない人物である。

しかし、レキⅡカリブスという人物は謎が多いが、その死に様は有名である。

少年少女達が聞く、御伽噺にも出てくる程なのだから。

要約すると、彼は神の啓示を受け、宝剣カリブスを作った。

そして、単身魔人と言われる恐ろしい怪物達と戦った。

無事魔人達を倒したが、彼も致命傷を負い、その直後に命を落とし。

その魂は宝剣カリブスと共にあり、カリブスを守護する神になった。

現実離れしているため、誰かが誇張した話だろうと思う。

彼の存在等なかったと言う学者もいるが、ロキⅡカリブスは彼の息子だったというのは事実であるため、彼の存在はほぼ間違いないだろう。

しかし、宝剣カリブスを作り出したり。また彼の偉業を考えると全てが真実とは到底思えないと思ってしまう。

しかし、もしかしたらレキⅡカリブスの魂は本当に宝剣カリブスの中にあるのではないかと思ってしまうのも事実なのだ。

現に、宝剣カリブスが存在しているこのカリブス城下街には一度も
亜人の襲撃や山賊の被害がないのだから。

多くの謎につつまれたレキィカリブス。

後幾数年もすれば彼の謎は明かされるのだろうか？

出来る事ならば私自身がその謎を解き明かしたいと願う。

カリブス国所属の歴史学者の研究日誌2

【カリブス王家く宝剣カリブスく】

前述の通り、宝剣カリブスは多くの謎に包まれている。

この剣はいまだ、レキルカリブスが突き刺してから一度たりとも抜かれた事がない。

周りから掘り起こそうとしても、剣が刺さっている周辺は鉄よりも硬い金属で出来ているかのような硬さなのだ。

そのため、一説では、彼の剣を抜くのは国家の危機を救う勇者ではないかと言われている程だ。

そして、今現在この剣を見る事が出来る人間は限られている。

刺してあった場所はカリブス王城の中央なのだ。

限られた人間、それは私の様な歴史を研究する物や王族、一部の騎士のみだ。

私はこの剣を見た時、とてつもなく巨大な何かの前に居るような気さえた。

この国の王よりもそれは尊い存在のようにさえ見えたのだ。

こんな事を誰かに言っても信じてはもらえないだろうとは思う。しかし、あの剣には神が宿っていると私は信じている。

出なければ400年も前の剣が存在する事は出来るであろうか？

私達人間が今だ理解できない物が、カリブス家の宝剣ではないのだろうか。

宝剣カリブスがもしも抜かれた時が来るとしたらそれは、この国の危機の時なのかもしれない。

それは、とても恐ろしい事ではあるのだが。

私自身の学者の血とでも言うのだろうか。

その場に立ち会ってみたいと思ってしまう。

宝剣カリブスが世に出てから長い刻がたった。

しかし、いまだ宝剣カリブス以上の武器はこの世に出ていない。

これは、神が創った剣故ではないのだろうか。

これを知り合いの学者に話した時は笑われてしまったが、私はこの説は間違えてないと思っている。

今となつては、カリブス家と宝剣カリブスの関係を全てわかる人物はこの世に居ないだろう。

もしも出会える事があるのなら、聞きたい程は山ほどあるというのに。

何故、剣と家名を同じにしたのか、どうやってあの鉄から剣の形にする技術考えたのか。

そして、カリブスとは一体どういう意味があるのか。

今の時代ではそのどれも知る事は適わない。

他の者達はカリブスとはく守護神を意味する、実際はどのようなのだろうか。

どのような思いでそう名づけたのか。

宝剣を作ったのは本当にレキリカリブスという人物だったのだろうか。

疑問は次々と浮かんできてくるが、答えは一向に知る事は出来ない。

だからこそ、私は歴史学者をやっているのだが。

いつか、全てを知る時は来るのだろうか。

その時が来るとしても、私は生きていないだろう。

何も知らないまま死ぬというのは恐ろしい物なのだと、今更ながらに気付かされた。

私は、生涯カリブス家の歴史を調べようと思っている。

とある酒場にて、吟遊詩人の語り

それは、遙か数百年も昔の話となります。
まだ、この世に3つの国しかなかった時代。

この世界を統べる人間の国、カリブス国。

今と比べればとても小さな国でした。

そこに、赤髪を纏ったとても美しい姫がいました。

しかし、彼女は国王、王妃のどちらにも似ていなかったために、蔑まされ不遇な人生を送っておりました。

赤髪の姫はどうして私は他の家族と違うのだろうと悔やみ涙を流し続けたのです。

「誰も私を愛してはくれないの」と呟きながら。

彼女の辛く悲しい時間は長く、生まれてから15年成人するまでも続き、家族であった王や王妃達だけではなく、家臣である国関係者の者達にまで「王族の血族ではない」と言われる程でした。

しかし、ただ1人だけ彼女を守る騎士がおりました。

騎士は普通とは違った価値観を持っていたためか。

あまり、評判の良い騎士ではありませんでした、それには理由があったのです。

今の時代では、王や特定の人物に忠誠を誓う事も珍しくはありません。

ですが、当時は特定の人物にではなく国に忠誠を誓うのが騎士の常識でした。

しかし、その騎士はただ1人、国ではなく赤髪の姫ただ1人に忠誠を誓っていたのです。

彼女は信じられない気持ちがありました、心から騎士の存在を喜びました。

それが恋心へと変わるのに時間はかかりません。

騎士は姫の恋心に気付きましたが、それに応える事はしません。

いえ、出来なかったと言えるでしょうか。

騎士は姫の事を深く愛しておりましたが、愛に応える事を禁忌と戒めたのです。

姫と従者の愛……それは今でも禁忌とされた事です。

「下の者が主人に恋焦がれてはいけない、それは逆も同じ事なのです」

そう言い続けて騎士は姫と恋柄になる事はありませんでした。

姫は少し悲しい気持ちになりましたが、「一緒に居てくれるなら……」と自分の気持ちを誤魔化しながら騎士と接するようになりました。

1人でも赤髪の姫を認めてくれる人物が居る。

それだけで彼女の世界は花が開いたように幸せな日々へと変わりました。

しかし、そんな騎士と姫の日常が終わるのは突然の事でした。

いえ、必然とも言えたのかもしれませんが……。

赤髪の姫は騎士の愛がどうしてもほしくなってしまったのです。

姫が騎士に愛を囁けば、騎士はとても嬉しそうな笑顔を浮かべましたが、一向に応えようとしません。

赤髪の姫は王族だから、彼は応えてくれないのではないかと考える様になりました。

それならば……と赤髪の姫は王族を辞めるために父である国王へと

直訴をしたのです。

「私は名を捨て、1人の国民にしてくださいませ、北の集落は人が足りないと聞いております、その地に私を流してください」

当時流刑は死刑に次ぐ思い罪です。

といっても、本来は東にある大河に罪人を流すといった事ではありませんが。

そして、彼女が北の集落へと王族という地位を捨て流せと言いました。

北の集落……今ではカリブス国の北は多くの亜人族や人間達が暮らす独立国家となっています。

しかし当時は亜人種と敵対していた人間です。

亜人種も当然敵対心を露にしておりました。

どちらにも多くの被害がでていたのです。

その危険な地域に流してくれ。

姫はそう言いました。

国王はいきなり何を言うのかと訝しげに姫を眺めますが、姫の意思が固く本気なのだろうと感じ取りました。

しかし、赤髪の姫を流刑にする程の罪などありません。

悩んだ王は考えた結果、是と答えました。

彼女は国王から了承の意を聞くととても喜びました。

赤髪の姫はその時初めて国王へ笑顔に向けたのです。

しかし、国王はその笑顔を見て、顔を顰めました。

王族の誰にも似ない赤髪の姫は、王にとって邪魔者でしかなかったのです。

そして王は重臣の1人を呼びました。

なんと、国王は何を思ったか、彼女を亡き者にしようと考えたので

す。

赤髪の姫は周りが思っていたより賢い人でした。

良いといわれた瞬間はとても嬉しく思いましたが、数瞬の内に何かあるのではないかと思い、聞き耳を立てていたのです。

そして、彼女は自分を殺すように指示する父親の声を聞いてしまったのです。

姫は今までに無いほどの傷を心に受けてしまいました。

生来冷たく扱われては居ましたが、赤髪の姫は父親を愛していました。

しかし愛する父親の口から「赤髪の姫を殺せ」と発せられた言葉にただただ涙が溢れた事でしよう。

そして、彼女はただ一つの心の拠り所である騎士の元へ走りました。豪華とは言えませんが王族が着るに価するドレスを脱ぎ去り。

民達を着る一般的な服を着て。

突如騎士の前に現れた姫を見て騎士は驚きましたが、只ならぬ赤髪の姫の格好と雰囲気慌てて心を鎮めながら姫に聞きました。普段のドレスではなく、何処にでもあるような服を着た赤髪の姫が走って着たからです。

「姫、慌てて一体どうしたのですか？ それにその服は？」

騎士は赤髪の姫に聞きました。

そして、赤髪の姫の口から驚くべき事実を聞いたのです。

騎士は元々国への忠義等ありませんでしたので恨みへと変わるのに時間はかかりませんでした。

そして、騎士は彼女に今後はどうするつもりなのかと聞くと、姫は言いました。

「ここではない何処かへ連れてってほしい」

騎士はギルドに所属していた時期があったために、依頼をしながら旅をして、いいところがあればそこで暮らしましょうと姫に言いました。

赤髪の姫はその言葉を聴いて感動し涙を流したと聞きます。

2人での旅路はそれなりに厳しい物でしたが、姫は生まれてきて初めて充実した日々を感じる事が出来たのです。

外について何もしらなかった赤髪の姫。

赤髪の姫は騎士と共に外の世界を知っていくことが幸せだとも思っていました。

しかし、旅は唐突に終わりを迎えてしまうのです。

2人が長い旅路の果てに辿りついたのは、旧エルドマド帝国でした。街に着き、一息ついた2人でしたが、2人を帝国兵達が囲み始めたのです。

姫はエルドマド帝国の正妃となるのだと言われ、困惑しました。

当時の王は消えた姫を殺し消し去ろうと考えておりましたが、姫は何処かへ消えてしまった。

そのため、帝国に王妃として送ると言ったが、その騎士が姫を拉致して帝国領地へ逃げてしまった故、彼女を救ってほしいと帝国へ言

いました。

邪魔だと思っていた娘であつたとしても、関係の悪かった2国の友好関係を築く切っ掛けになると読んだのです。

そして、帝国は彼女を躍起になり探しました。

姫の美しさは帝国領内でも有名だったのですから。

当時の帝王も赤髪の姫の姿見を見て、一目惚れをしたとも聞いた事があります。

姫を見つけた帝国兵は彼女を城へ連れていこうとします。

騎士は彼女を守るべく、帝国兵に襲い掛かりました。

騎士はとても強く、帝国兵を300人以上倒したとも言われています。

しかし現実は無常。

騎士は疲れのせいか、隙を取られ姫を人質に取られてしまいました。騎士は悔しそうな表情を浮かべたまま、兵士達に貫かれていきます。そして、騎士は倒れ伏し、命の灯火を消してしまったのです。

ああ、なんと憐れな事か……愛する人を守れず、道半ばで倒れゆく騎士。

しかし、天は彼ら2人を見離さなかったのです。

騎士の死に行く様を見せられた赤髪の姫は深く悲しみ、自分を捕らえている兵士から剣を奪い取ると自分の喉下へ剣を突き刺しました。捕らえていた兵士は突然の事に驚き、彼女を放すと、姫はゆっくりとした動作で騎士の下へ歩いたのです。

彼女の刺した短剣は明らかに致命傷でした、傍から見ても刺した瞬間に死んでもおかしくない程の傷でした。

しかし……彼女はそのような傷を負っていても一步一步確実に騎士へと近づいて行きました。

そして、騎士に抱き付くように倒れ深い眠りへとついたのでした。

「騎士様、今貴方と添い遂げます」

と言が残して。

その後、兵士は姫を騎士から離そうとしましたが、何人がかりであつても2人を引き離す事はできませんでした。

そう、天が2人を死して尚別れさせないかのように。

仲間を殺された兵士達は怨み等すべて忘れ、ただ自分達の過ちに涙を流しました。

帝王も2人が深くそう死して尚愛する2人を痛く感動したと聞きます。

そして、帝国は2人を神々が認めた夫婦であると帝国領で盛大に祭儀が行われました。

後に行われる国祭の一つである<双伝祭>と呼ばれる祭りの原型と呼ばれております。

死後、赤髪の姫は自分自身の愛を貫いた尊き人と色々な人々から愛されました。

そして、騎士は騎士の中の騎士と羨まれ、理想の騎士と呼ばれ続けられるのでした。

赤髪の姫の名はフェティーダーカリス。

赤髪の姫の名前は有名ですが、騎士の名前はよくわかっていません。

ただ、姫からはラフィと愛称で呼ばれていたと言われています。

2人の墓は旧帝国領の何処かにまだ存在していると伝えられているそうです。

ローザⅡアツハバーナ1

アツハバーナ家の長女として生まれた私は王族と結婚するのだと、子供の頃から言われて育ってきた。

3歳ぐらいの父がそう言うのだからとそう思っていた。

けれど……5歳の頃から時折見る夢を見てから、それだけは嫌だと、ただ理由もなく思い始めた。

それがどんな夢だったのか思い出せない、ただとても悲しくて、自分の無力さを呪う気持ちだけが起きてからも続いて、小さい頃は何度も泣いたのを覚えている。

それが7年も続けば、父親が決めた相手と結婚し、ただ生きていくのなんて嫌だと反発し続けた。

それから家を飛び出しギルドの門を叩いた。

ギルドは私の出生等まったく気にした様子もなく受け入れてくれた。城下街に拠点を置くのはただ嫌で、今だ力の無い私はすぐに家に帰されるのだけは避けたかった。

だから、すぐに始まりの街へと拠点を移し、自分の腕を磨き続けた。下位ランクの時はとても辛かったのを覚えている。

私の体を舐めるように見る男の視線。

一緒に依頼を受け、その野営中に襲われかけた事も数多くあった。けれど、どうしてかそのタイミングで亜人や盗賊達が襲ってきて、未遂で終わっていたのは本当に良かったと思う。

自分で言うのも変だと思うけれど、私は見た目はいいと思う。

それに、子供の頃から好きだった物語に出てくる赤髪の姫と同じ髪の色も自慢だった。

父親や国の重臣の人達も私の髪をほめてくれた。

だからこそ、下位ランクだった私はなるべく素顔を見せない様にし

て、性別をわからないようにもした。
胸が人より小さかったのも性別をわからなくできた要因だったとは思う……少し悔しくはあるけれど。

　　齡16になる頃には、Bランク間近と言われる程にまでなっていた。

　　そして、ギルドから言われた昇格条件がコボルト50匹の討伐かゴブリン100匹の討伐。

　　最初はコボルトの方が数も少なかったため、コボルトを狩ろうと思った。

　　けれど、コボルトを目の前にした時どうしても彼等を殺す事なんてできなかった。

　　確かに襲われた時は自衛のために殺した……けれど、彼等を殺す事はいけないことなのではないか。

　　そう私の本能が叫びだした。

　　それからはゴブリンを倒す依頼だけを受け続けた。

　　そして10日もしないうちに無事Bランクにあがった私は、ジャイアントアントの被害が多発しているえる、エルドマド帝国に拠点を移す事にした。

　　エルドマド帝国はジャイアントアントの被害が多い為か腕の立つ上位ランクのメンバーが多い。

　　けれど、そんな上位ランクのメンバーでもアシッドアント等に殺されるという被害も多かった。

　　この時からだったかな、私が全身を鉄の鎧で固め始めたのは。

　　最初は息苦しかったし、重かった。

　　けれど、この国で修練を続けるうちに自分の力が異常な速度で伸び

ていた事もわかっていた。

1年もすれば1人でジャイアントアントの巣を潰せるぐらいの腕を身につけていたし。

不思議と息切れを興す事もなくなっていた。

最年少でSランク昇格という噂が流れる程の実力を得た私がある噂を聞いたのはそんな時だった。

『赤髪の姫と騎士』の墓がこの国のどこかにある。

私はその噂に飛びつき、今までに稼いだ財産を使い情報を集めた。しかし、情報は全くと言っていいほど進展もなく、出任せだったのかと諦めかけていた時だった。

帝国軍の将軍を護衛する依頼を受けた時の事だった。

将軍は50代ぐらいの顎に長い白髭を携えた美丈夫だった。

そして、将軍という偉い人物なのに、丁寧に頭を下げ「今日はよろしく願います」と言い、依頼の場所へと歩き始めた。

そこは帝国首都から半日も歩かないで到着する近くの丘だった。

そしてそこには小さな石造りの墓が1つ。

墓の前に到着した途端に私の目から涙が流れ始めた。

何故涙がいきなり流れるのか、さっぱりわからず困惑していると、帝国軍の将軍が呟き始めた。

「この墓は私が尊敬している騎士と姫の墓です。」

2人は生きてる間に添い遂げる事はできませんでしたが、体だけでもと私が作った物なんですよ」

呟き、花を添えてから、「戻りましょう」と言い、岐路に着いた。帰り道の間に、私の好きな物語はあるかと聞かれたので、赤髪の姫と騎士の話が好きだと言うと、とても嬉しそうに顔を綻ばせてから。

「私も一番好きな物語です」

と言った。

それからは何故か、赤髪の姫と騎士の墓を探すという意欲は鳴りを潜めた。

自分でもなんでかなんてわからなかったけれど、あの墓がそうだったんじゃないかとなんとなくではあったけれど思う事にして、自分の腕を磨く事だけに集中した。

ジャイアントアントの巣を1人で数個壊しているとギルドマスターから召集を受けたのは20になった時の事でした。

数年ぶりにカリブス国に戻り、ギルド本部にいくと、現マスターから直々にSランク昇格を告げられた。

そして、その最初の任務がエルドラド帝国首都の北東にあるコボルト集落の調査、または殲滅を伝えられた。

どうやら、帝国領内のある村に人語を喋るコボルトと数匹のコボルトが現れ、村に襲い掛かったらしい。

そして、近くにコボルトの集落を発見したので、彼等の生態を調べたいとギルドマスターは言った。

内心は嫌だったが、ギルドマスター直々の命令だったために、了承を伝え、今回の依頼に赴くメンバー達と一緒に帝国へと向かう事になった。

その集落に到着した途端家の中から百以上は居るコボルト達が現

れた。

しかし、驚いたのはコボルトには色々な顔立ちがあった事だった。私が過去に見たコボルトはどれも同じ顔だったため、とても驚いた。

コボルトの中には、私達に襲いかかる者と怯え縮こまる者、子供を守ろうと必死に抱きかかえる者が居た。

私達がやっている事はまるで盗賊と同じではないか。

彼等は彼等の生活がある、その上で私達が戦いあうことはしようがないのかもしれない。

けれど、コボルトは村に襲い掛かってくる事は私が知る限り今回しなかった。

しかし、この光景はなんだ。

人間がコボルトを虐殺してるだけじゃないか。

家族だと思われるコボルト達にメンバーが襲いかかり、武器を持ったコボルトは後ろに居る子供と妻と思われるコボルトを構うように戦っている。

しかし、メンバーはその子供と妻のコボルトを人質のようにして、

コボルトを殺している。

私は調査をしにきたのだ、なのに……

数時間もすれば、集落には無残に殺されたコボルト達の死体と、仕事をしたと満足気なメンバー達。

このやるせなさはなんだ。

私はどうなっても無力なんだろうか。

またしても、誰も守れないのか。

またとはなんだ……？

私は誰かを守ろうとした事は一度もなかったはずだけれど。

その疑問に考えていたが、今後の指示を1人のメンバーに聞かれたので戻る事にした。

去る際、集落だった場所を見ると、無残に崩された家屋と悲しげに倒れ付したコボルトの死体が残っていた。

どれだけ謝罪をしても、彼等は私達を恨むんだろう。
私は彼等に何をすれば贖罪となるのかだけを考えていた。

依頼が終わった後、襲われたと報告の有った集落に聞くと、
人間に怪我人はなく、食糧を少し取られただけと聞かされた。
人語を喋るコボルトは何か言っていたか聞くと。

「ワケテクダサイ」と聞こえただけらしい。

それは、食糧を分けてもらいたかったのではないかと内心思ったが、
保身に走り、深く追求する事はできなかった。

それから数ヵ月後、始まりの街から北側に行った所にコボルトの
集落を発見したと言う報告を受けた。

規模は前回よりも小さく、生き残りが集まったのだらうという見解
だ。

その際、私もその任務に出る事を立候補し、今回の指揮をギルドマ
スターから任された。

今回は数も少ないと言う事で10人程で向かう事となった。

集落が目に見え始めた頃、集落から数十人が東に向け飛び出した
コボルト達が目に見えた。

私は待てとメンバーに叫んだが、彼等は頭に血が上っているのか、
私の制止を聞かずに追いかける。

このメンバー達はなんなのだ、何故こうもいう事を聞かない。
今回先頭を走っているのはBランクメンバーだ、残りはCランクだ
ったと思う。

もしかしたら、あのBランクメンバーとCランクのメンバーは同じ
クランに所属しているのかもしれない。
けれど、そんなのは関係ないはずだ。

私がこの指揮を任されているというのに、彼等は追いかけて続ける。

私は何とか止めようと彼等を追いかける事にした。

足の遅い順に1人また1人と殺されていく光景を見せられ、齒軋りする。

なんとか止めないと、しかし案が浮かばない。

彼等を殺せば止められるだろうが、そうなると私は……

どうして、こんな時に保身に走ってしまうのかと自分に嫌悪感を覚えはじめた、その時だった。

コボルト達が逃げる方向に大きな集落が見えていることに気付いた。あんな所に人間が住んでるなんてのは聞いたことはない、しかしコボルトがあんな大きな物を作れるというの？

そして、数分もしないうちに集落から白い体毛を纏った”何か”が駆け出してきた。

それはとても早く、数分もしないうちに逃げているコボルトを抜き、先頭を走っていたメンバーに襲い掛かる。

Bランクのメンバーの剣と白い体毛の何かが衝突した瞬間、こちらに吹っ飛んでくるメンバー。

「ぐあっ」

苦悶の表情を浮かべながら悲鳴をあげる。

そして、動きを止めたその”何か”を見た瞬間、私の胸がドクンと鼓動を跳ね上げる音がした。

私の体は歓喜に震える。

思考が停止したのは数秒だったと思う。

ハッとすると剣や槍を持ったコボルト達が白いコボルトに追いついていた。

今までのコボルトとは明らかに雰囲気が違う。

そう思い。

「双方剣を納めませんか、私達は殺し合いをしに来たわけではありません」

コボルトに私の言葉が通じるかわからなかったが、前に人語を喋るコボルトが居ると聞いた事があった。もしかしたらと少しの願いを込めて聞いた。

「ならば、なぜあの者たちに襲い掛カッタ？」

ゾクリとまた体が震える。

白いコボルトの声を聞いた瞬間、胸が熱くなり、目から涙が溢れてきそうだった。

何故と思う自分も居たが、やっと会えたと喜ぶ私も居た。

「あなたは……人間の言葉がわかるのですか？」

「ア…発声はいまいちだが……会話ハできてるハズだ、それよりも質問ニ答エロ」

どこか分りにくい発音ではあったが、ちゃんと人間の言葉だとわかる。

そして、彼の左後方に居るコボルトが何か吼えると、白いコボルトも何かをうなっている。

再度、白いコボルトが唸ると周囲のコボルト達が吼え始める。何を言っているのかわからないが、彼からの質問に答えていない事に気付き答える事にした。

「襲撃をしてきたのはあちらが先です、始まりの村に20匹程のコボルトが襲ってきたのでその撃退の後、追撃を行いました。

私としては話し合いが通じるのならば殺し合いをしたいとは思っていません」

剣を持ってない片方の手で顎をなで、考え事をしているようだ。

何処か可愛らしいその仕草に、彼の顎を私が撫でたいと言う欲求に襲われるがなんとか我慢する事ができた。

「そうか……全てを信じろトイウのは無理だが、そちらの言い分がある程度は信ジよう

しかし、家族をコロされているル者もいるカラナ、徹底抗戦ヲ唱エルものガほとンドナノだ」

彼等が人間に徹底抗戦を唱えるのは私達のせいだ……
罪悪感に頭を下げ、申し訳なく思う。

けれど、コボルト達と戦わなくてもいい未来が作れるのは今しかないと考えた私は顔をあげた

「そうですね、確かに恨みは深いと思います……しかし、貴方はどう思っているのですか？」

彼も私と同じ考えなのならば、確信がもてる。

人間とコボルトがともに暮らせると言う未来を。

「出来ルならば共生ヲしたいと思う、しかし……人間は欲に目ガクラミ裏切ル者もイル、信用デキルかは怪シイ。

ソレに怨恨は深い、なラバお互イに不可侵を結ブベキだと思う」

彼も私とほぼ同じ考えを持っていた。

その事がとても嬉しくて、涙が目潤していくのがわかる。
心臓の動きはさっきから激しく動き続け、彼に近づくと身体が急かす。

けれど、ソレはまだ早い。

まだ、人間とコボルトは危ない関係なんだ。

「コボルトという種族から見たら、人間の多くを恨む人達は居るのでしょう。

私も出来れば共生していきたいと思いますが、それはまだ難しいようです。

それならば、人間とコボルトの国同士がお互いに干渉しないようにしましょう。

ただし、私としてはコボルトの生活というのを知っておきたい。

コボルトと共に暮らしたいと思う者がいれば、受け入れてもらいたいのですが」

少しでも私の願いが届いてほしいと言う願いを込めて。

私の気持ちを吐き出していく。

周りのメンバーは私を睨んでいるが構う事なんてない。

好機は今しかないのだから。

「ソレガ毘ではないトイウ証拠ハアルか？」

「赤髪の姫へ誓った騎士とSランクのメンバーとしての誇りに誓い」

誓いをたてた騎士は私が誰よりも尊敬する騎士だ。

その騎士と私のSランクとしてのプライドにかけて誓う。

そう思いを込めて呟くと、彼の目から涙があふれ出るのが見えた。

「フエティーダⅡカリブス……」

彼は誰かの名前を呟いた。

カリブスはカリブス国の王族とエルドラド帝国に数名しかいない。
フェティードとは誰かと考えた途端、心が再度高鳴った。

彼だ、彼なのだと。

私は途惑いながらも彼に質問する事にした。

「コボルトも赤髪の姫と騎士の物語を知っているのか？」

「いや、私は人間の記憶ガアルからだ。

物語ヘトナツタのだな、ローズとの旅路が」

彼は人間の私から見ても、とても嬉しそうに、そしてとても悲しそうな表情浮かべ呟いている。

その表情を見た瞬間、感じた事の無い愛しさが心を埋めていくのを感じた。

「貴方はあの物語を知っているだけではなさそうですね」

コクンと頷くと、メンバー達が驚き騒ぎ出す。

「コボルトがああ物語を侮辱するな」

Bランクメンバーの1人が腹立たし気に叫ぶ。

メンバーの声を聞いて腹が立つのは私だ。

少し苛立ちながら、そのメンバーへと釘を刺す。

「少し貴方達は黙っていなさい、貴方は……騎士の名前を知っているのですか？」

「騎士の名はアラフィル、アラフィルⅡアッハバーナ。

アッハバーナ家の三男だった、フェティードⅡカリブスと旅立つ数日前に家族の縁を切られている。

姫ノ名はフェティードⅡカリブス、偽名でローズ、と呼んでいタ」

アラフィルⅡアッハバーナ。

私の血筋なのは家名を聞けばわかる。

しかし、私が知っている限りそんな人はいない。

父親からそんな人の名前は聞いた事はなかった。

「騎士が死んだ後、姫はドウナツタ」

「騎士の後を追って自害したと言い伝えられています。

その後、騎士と同じ墓に埋葬されたと言われています。

現にエルドラド帝国の首都近郊に2人の墓は存在しておりますから」

質問に答えると、涙を流しながら彼は顔を綻ばせ「ソウカ」と呟いた。

「話が逸れましたね、コボルトは今後人間と敵対しないと言うのであれば、全メンバーを代表してコボルトとは友好的関係を築いていく事を誓います」

「ワかった……我が集落の全コボルトを代表して誓おう」

「ありがとうございます、人間とコボルトの友好関係を築く為の話し合いをしたいと思います。

少々調べたい事もありますので、今日の所は戻らせていただきます。

また後日そちらに赴かせていただきます」

「ああ、反对者モイル事だろうから気をつけろ」

なんとしても、コボルトとともに生きる道を繋げて見せると誓い。

コボルト達と別れた。

メンバーはこちらを睨んでいるか、知った事ではない。

私の制止した事はギルドマスターに報告する事も決めた。

「先に戻っている、軽はずみな行動は慎みなさい」

それだけ残すと全速力でカリブス国首都へと戻る事にした。

調べる事はたくさんあるのだ。

ローザ・アッハバーナ2

実家に戻り、両親に挨拶する事なく、書庫へと脚を運んだ。

家系図が何処にあるのかはわからないけれど、虱潰しに探す事にした。

幾つもの棚を探したが、全然見つからない……彼のいう事は本当だと思っただけで、自分の目で確かめたい、そして他のメンバー達にその事を証明したかった。

それから2時間経っても見つからずここにはないのかなと思い始めた頃、名前は覚えてないけれど、老執事が何を探しているのか聞いてきてくれた。

そして、家系図を探している事を聞いたが、どうやら、現当主の父上が持っているらしい。

執事をお願いして父上に会えないか聞いたけれど、今はカリブス城に居るため、会うことはできないと伝えられた。

そういえば、この執事はこの家に何十年と仕えていたはず……もしかしたら、知っているかもしれない？

「一点、貴方にお聞きしたい事があるのですがよろしいですか？」

「私に答えられる事でしたら……」

「何十年前にアッハバーナ家にアラフィルという人は居ませんでしたか？」

老執事にそう聞くと、一瞬だけ表情が固まったのが見えた。

「申し訳ありませんが、私は存じません……」

たぶん、この執事は答えられない理由があるみたい……
それなら、彼にしつこく聞くのは酷なのでしょう。

父上は、今日ここに戻る予定はないらしいので、また後日来る事を執事に伝えて、ギルドが運営している宿に泊まる事にした。

翌日、昼頃に屋敷に戻ると、父上はまだ休んでいる最中との事だったので、応接室で待たせてもらう事にした。

2時間程すると、父上が執事と共に現れた。
ソファから立ち上がり、父上へ頭を下げる。

「お久しぶりです、お元気そうでなによりです」

「お前も、息災で何よりだ……それで私に聞きたい事とは何だ？」
挨拶も程々にソファに腰を下ろし、一息ついてから父上へと聞きたかった事を聞くことにした。

「父上はアラフィルという人物を知っていますか？」

「……残念ながら私の知り合いにはその様な者はいないが……？」

少し間を空けてから答える父、その間は動揺なのか、本当にそんな人物を探していたのかは私にはわからなかった。

けれど、少なくとも執事は心当たりがあるはずなんだ、それならば父上が知っていてもおかしくない。

「赤髪の姫と騎士に出てくる騎士の名前です、アラフィル・アツハバーナと聞いております」

「ほう……ソレは奇遇だな、我が家名もアツハバーナだしな」

「父上、誤魔化すのは止めに致しませんか？ 私はまだ真実が知りたいだけです。」

その執事の反応を見れば、我が家にその人物が居たという事はわかります」

面倒な駆け引きなんてする時間が勿体無い。

父上がどんな思惑で誤魔化しているのか知らないけれど……

「誤魔化すか……しかし、アツハバーナ家にはアラフィルという名の者はいないが？」

「ならば家系図を見せてもらってもよろしいですか？」

父上は大きな溜息を吐き、「少し待て」とだけ言い、退室していった。

執事は何処か居心地悪げにしていた、彼に聞けば教えてくれるだろうか？

10分もすれば、父上は一冊の本を持って戻ってきた。

「コレが家系図だ、確認してもらえないかな」

そう言って、私に家系図を提示してくる。

父上から受け取り、本を開く。

家系図といっても、対して何十ページと並んでいるわけじゃなかった。

精々10ページ程だろうか？

そして、一通り読んだけれど、アラフィル・アッハバーナという人物の名前は無かった。

彼が嘘をついたの……？

いや、彼が嘘をついたなんて考えられない。

それなら……そういえば、彼は縁を切られたと言っていたはず。

つまり、何処かに消された跡が……これかしら？

一つだけ不自然といえど不自然にあいた部分がある。

「ローザ、アラフィルという人物は居ないであろう」

「いいえ、父上……アラフィル・アッハバーナという叔父は確かに居たようです」

その言葉に、眉間に皺を寄せてこちらを見る父上が居た。

「何を言い出すのだ」

「父上、この部分、不自然だと私は思いますが……それに、アラフィル・アッハバーナは縁を切られたと聞いております。間違いないですよ？」

最後の一言は執事に向けて言うと、執事は顔から汗を流している。どうやら、私の予想は当たりのようね。

「それなりの裏づけはあるという事か……」

確かに、アラフィルは私の弟で居た。

当時、末姫のフェティータ王女を拉致した挙句、心中した馬鹿者だ。

皆と同じ扱いをしておれば、あんな事にはならなかったというのに……本当に馬鹿な弟だった」

彼に向ける言葉はキツイものだったけれど、その表情はとても悲しげに見えた。

たぶん、父上は彼の事が弟として愛していたのだと思う。

「アラフィル・アツハバーナを知っている者はどれくらい居ますか？」

「私の兄弟と前当主、それとこのマークシンぐらいだ」

それならば、彼が知っているというのは不自然だ。

という事は、彼は本当にアラフィル・アツハバーナの生まれ代わりだという事なんだろう。

「父上、ありがとうございます。

それでは、私は急がなければいけないので、これで失礼します」

「ああ、ローザ……幸せにな」

「ええ、父上も」

屋敷を後にしてから、私はギルドへと足に向けた。

たぶんギルドマスターならば私の考えに賛同してくれるだろうか

思ったが、彼を説得しなければコボルトとの共存は成り立たないのだから、私が頑張らなければいけない。

ギルドに着き、受付の女性へギルドマスターとの面会を伝えると、すぐに会ってもらえる様で良かった。

「ローザリアツハバーナです、入室してもよろしいでしょうか」

ギルドマスターの居る部屋の前で確認を取って、返事を受けてから入室する。

ギルドマスターは執務用の机に座り、私を待っていたようだ。

「やあ、来るのを待っていたよ。

少々待ってもらっていいかな？　すぐに終わらせるから」

「はい」

「ああ、その椅子に座って待っていてくれ」

「はい、失礼します」

ギルドマスターに進められたソファに腰を下ろし、どう伝えようかと思案している間、部屋の中はペンを走らせる音だけが響いていた。

「待たせたね、それで今回の用件というのは何かかな？」

「はい、先日のコボルト集落の件です」

「それは受付の方で済ませる案件じゃないのかい？」

「はい、今後の人間とコボルトとの大事な話になると思います」

私の言葉にギルドマスターは興味を示してくれたようでした。

ギルドマスターの返事を待っていると、「続けて」と答え、彼との出会いやコボルトという種族は私達と共存したいと言っていた事を伝えた。

「コボルトが人語を喋る……それに、共存を願うか……今までメンバーとして生きていたけれど、信じられる話じゃないね。まるで絵空事のように聞こえる」

「ですが、コボルトが人語を話していたのは確かです。それに、その集落の代表と名乗っていた白いコボルトは……ギルドマスターは赤髪の姫と騎士を知っていますか？」

「あの物語を知らない騎士とメンバーはいないよ、それがどうしたんだい？」

「その白いコボルトがその物語を知っていたらどうしますか……」

「そんなのは共存に関係無いんじゃないのかな？ それに、人語を喋るんだ人間が作った物語を知っていたって不思議じゃない」

「いえ、真相を知っているとしたらです」

「真相……？ 興味深いね」

「帝国首都の近くにはその墓があります」

「ふむ……それで？」

「その騎士の名前はアラフィルⅡアツハバーナ、姫の名前はフェティードⅡカリブスと言います」

「アツハバーナ……君の血縁者だね、それにお姫様は王族の王女様か。」

けど、それは無いと思うけど？　だって、アラフィルという名前のアツハバーナ家の人間はいないし、王族にもフェティードと呼ばれた人物は居ないはずだ」

アツハバーナ家と王族であるカリブス家はその偉大さ故に悪事に使われる事がよくある。

自分はアツハバーナ家の人間だと名乗る者も昔は少なくなかった。そのためにアツハバーナ家とカリブス王家では新しく生まれた子供等の名前だけを載せた家系図を公開しており、一般市民でもそれを観覧する事は可能となりました。

ギルドマスターは国の実力者の1人でもあるため、また依頼者が虚偽の依頼等を行うのを防ぐ為に、アツハバーナ家と王家の家系図はチェックしていたでしょう。

「いえ、アラフィルⅡアツハバーナという人物は実在しております、現当主のご兄弟でしたから」

「君のお父上の他には1人の弟だけと記憶していたけれど？」

「3男がアラフィルという名前です、勘当され家系図から消されて

いたので知らないのはしょうがありません」

「それを証明できる者は？」

「現当主と先代当主、それと昔からアツハバーナ家に仕えている一部の使用人です」

ギルドマスターは顎に手を置き、数瞬程考えると、顔をあげる。表情を見る限り何かを決めたようだ。

「君の言う事に偽りはなさそうだ、偽りだったとしても君にとっての得はわからない。

けれど、コボルトとの共存を決めるのは少し待ってもらいたい。君を含め、Aランク以上のメンバーを招集したいからね」

その日はギルドマスターと別れ、私は契約している宿へと戻る事にした。

それから7日程日が経過して、ようやくギルドマスターから召集がかかった。

私としては、1日でも早くコボルトとの共存を確かにしたいというのに……

ギルド本部の中にある会議室に入り、自分へと宛がわれた席へと腰を下ろし同じ様に席についている周囲に目を配る。

何度か見た事や聞いた事のある実力者であるメンバー達と明らかに装備が派手でその場にはそぐわない装備をしている人物が数名……たぶん騎士団の者達が立っていた。

「うん、これで全員ですね……さっそく本題に入らせていただきます。

実は、Sランクメンバーのローザがコボルトとの共存できるという説を唱えました。

その説を聞いた所、私自身もそれには賛同できると思います。

余程の反対理由がない限り、ギルドは今後コボルトとの共存を目指すと思っています。

なので、今後ギルドとしてはコボルト関連の討伐依頼は極力受け付けないという意味をカリブス国を初めとした国の方々に表明します。

ただ、人を無闇に殺した場合等犯罪行為と思われる行為をした場合は罰を与える為、盗賊達のような対応はとります」

ギルドマスターの言葉を聞いて、一番に反応したのは黒の光沢が目立つ帝国の者だった。

「コボルトと共存等認めん！ あやつらは害虫と同義！ 我が帝国の民達はどれ程の被害を受けたとお思いか！？」

それに続き、カリブス国の人物も反対意見を出していく。

「メンバーの方々もコボルトの被害を受けていると思います、それにあのコボルトが私達と共存を希望するとは到底考えられません、その会議場でも仮面を取らない者の虚言ではございませんか？」

私の中ではカリブス国にいい心象は受けない。

理由は？ と聞かれればわからないと言うしかないけれど、何故かこの国に忠誠を誓っている人達を見ると嫌悪感が先立ってしまう。

「ご両人、それは人間側の一方的な価値観だと思われます。

思い込みという物は時として人の視野を狭め、それが死と繋がる事もあるでしょう。

それは個人だけの話ではなく、そう国というものを滅ぼす可能性もあります」

ギルドマスターは冷静に反対意見を真っ先に出した2人へと向けて答える。

その言葉を聞いた2人は頭に血を上らせ、顔を真っ赤にしている。これが大事な会議に赴いた国の関係者かと思うと溜息が漏れる思いだ。

「ギルドマスターだからと言って勘違いをしていまいか？

御主等ギルドは国にいるからこそ今の地位があるという事を忘れてはいまいか？」

何を勘違いしているのだろうか……彼等の手が届かない場所や対処できない事を率先して解決しているのは私達ギルドだ、それをあたかも国が情けをかけてやらせているとも言いたいのだろうか？

「ハハハ、面白い事を国は言うもんですなあ」

大きい笑い声を上げて、声を出したのはギルドマスターの横にいる、Aランクメンバーの1人だろう。

確か世界一の臂力といわれる程の男だったと記憶している。

「貴様、その言葉、国へ対する侮辱と取るがよろしいか」

「それならば、あんたらが言った言葉はギルドへ向けての侮辱ととってもいいのかな？」

俺は構わんよ、国がギルドをそう評するのならば、俺はコボルトと一緒に暮らそうじゃないか。

それにコボルトというのは基本的に穏やかな人種だ、彼等は狩猟を生業としているのだから、その狩場を荒らせば人間に襲いかかるのは通りだろう。

お前らだって、自分の領分に他人が入ってくれば怒る、それと一緒だ」

それはどうなのかと思ったが、確かに一理あると私自身も思う。

それに、コボルト達にだって集落があるのだから生活をする。

そして、今まで使っていた狩場に突然我が物顔で人間が侵入すれば警戒して襲い掛かってくる。

私もその意見に同意と思い領き、ギルドマスターも領く。

他のメンバーは何を考えているのかわからないけれど、現状は共存派が優勢といった所だろうか。

「ぬぐっ……シャウトールの者の意見はどうか!？」

「へっ!？ あ、ああ……そうですね、共ぞひっ……カリブス国の方と同じ意見ですっ!」

共存を唱えようとしたのは丸わかりではあるけれど、カリブス国の使者の視線を受けて、悲鳴をあげるあたりシャウトール国はとても弱い国なんだろう。

なんとも情けないとも思うけれど、あの国はそこまで酷い国ではないのかもしれない。

「ふむ……現在は3対3で行った所ですかね、ただ……貴方方国に所属する方々は少々視野が狭くなっているようですが」

何処か挑発めいた言動を吐いて、ギルドマスターは彼等に視線を向ける。

はつきり言ってしまうえば、こんな会議は不毛なんじゃないかと思う。国の人々はコボルトだからと頭ごなしに批判しているだけだし、こちらの意見を頭に入れてると思えないのだから。

「カリブス国とエルドマド国のお二人に問いたい。

貴方がたはコボルトに文明は無いとお考えか？」

「当たり前だ、文明とは人間しか持ち獲ない英知の結晶である」

「あんな野蛮人が文明を持つなど考えるだけでおぞましい」

うん、彼等はどうしようもない人種なんだろう。

凝り固まった固定概念と選民意識。

嫌悪感が出てくるのはこの人達の考え方がこうだからなのだろうか。

「ふう……マスター、もう話すだけ無駄なんで帰っていいですか？」

だるそうに声を出して、ギルドマスターへと声をかけたのは……このギルドのナンバー2と言われる程の実力者だったかな？

「ドラス……もう少々待ちなさい」

「いえいえ、無駄ですよ。

いいじゃないですか、国は今後ギルドと関わらないと決めれば。

俺はコボルト達好きですもん、小さい頃森で怪我した時助けられましたし。

彼等が襲ってくるのは狩場を荒らしたというのもあるでしょうけ

ど、大半は家族を殺された恨みだと俺は思いますよ。

その禍根を消す事は難しいと思いますけど、難しいからと諦めたらそれこそ無理な話です。

何十年、何百年ともいう長い時間をかけて無くしていけばいいんです。

そのの第一歩が共存という手じゃないんですかね。

それに報告書にあった白いコボルトってのは、その集落の族長ですよね。

確か彼は先日Aランクのメンバーを倒したという傑物だったと村人から聞きました。

全面戦争にでもすれば彼等を根絶やしにできるかもしれませんがどね、人間にも少なくない傷を負うでしょうね」

彼が人間を倒したというのは初耳だった。

けれど、彼ならば実力者と言われるメンバーにも負けない程の自力はあると思う。

私達と話した時だって、殺せる所を合えて殺さなかった節が見当たるし。

「それもそうですね、では国の方々、ギルドは今後コボルトとは共存していく方針へと変えていきます。

コボルト側から依頼があればギルドはコボルトからの依頼も。

それと万一戦争になった場合は宣戦布告した方にはギルドは干渉を徹しますのでよろしくお願いします」

「ま、待て！ 万一それが罠だった場合、おぬしらはどうするのだ！？

下手をしたらお主らが死ぬかもしれんのだぞ！」

カリブス国の使者は慌てた様に捲くし立てるが、そんなのは既に覚

悟の上だ…それに。

「そんな事を言ってしまったら、何も出来はしません。

疑うという事はとても大事です、けれど疑う事だけをしてしまつたら手を取りあえるものも取り合えなくなってしまう。

例えばそれが罠だったとしても、その時はその時なのですよ」

ギルドマスターは言いたいことを伝えたと考えたのか、席を立ち「解散」と号令をかけて退室していった。

ローザⅡアツハバーナ3

その日から2、3日は目の回る忙しさだった。

メンバーになってから只管戦い続ける日々だったから、誰かに指示していくという行動に慣れていないのもあったんだろうけど。

現在ギルドの支部がある地域には既に北にあるコボルト集落との共存を決定した事をその歳の住民に告げ。

護衛依頼等を出している商人達にも協力を要請した。

商人達は最初こそ困惑していたけれど、襲ってくるコボルトが居れば盗賊達と同様排除すると伝えたし、商売の出来る場所が増えて、前まで行けなかった未踏の地で手に入るかもしれないという物品に魅力を感じたのだろう、数日後には是非協力したいとほとんどの商人が言ってきた。

そして、粗方人間側の理解を得て彼の居る集落へと出発できる事となった。

今回は西側から山を回り遠回りしたけれど、今回はカリブスから東北へと進んだ村を経由して向かう事が決定した。

今回は私の他にAランクのメンバーが1人とBランクのメンバーが3人着いて来る事になった。

Bランクの2人はコボルトとの共存と聞き、目を輝かせて喜んでい

る所を見た事があったので賛成派の1人だと思う。

ただ、他の2人はあまり好印象を持っていないみたいで、向かって

いる道中武器の点検等していた。

今から警戒していれば、和解出来る物も出来なくなるかもしれないというのに……

白いコボルトの彼と別れて約半月が経ちようやく集落へと戻る事が

出来た。

彼等も私達が来た事を知ったんだろう、数名のコボルトを従えて此方を出迎えてくれた。

表情はわからないけれど、何処か穏やかな感情を出しているのだと感じた。

「ようこそ、我が集落に」

彼がまずそう答えると、私についてきた他のメンバーが驚いていた。賛成派の2人は感動したのか身体が震えているのが横目から見えた。

「参上が遅くなりすいませんでした、やはり一筋縄には中々いかないうちでして……」

会議の時の国の使者や共存を良く思わないメンバー達の事を考えてそう答えると、彼は全て分っているかのように、クスリと笑ってくれた、其処に悪意は無く私の心に何か心酔していくかのような錯覚を覚えて困惑した。それを他の人達に気付かれてはいないと思うけれど初めて感じる感情だけあって途惑ってしまう……

「そうですね、ああ……ここで話し合うのも悪いのでどうぞ集落へお入りください。

お互い信頼しあう為にもそれなりの場というの必要でしょうか」

彼の言葉に反対派の2人が不意打ちで襲ってくるのではないかと警戒したのだろう、腰に掛けてある剣に手を掛けて警戒した。

思慮浅い人ならば襲うかもしれないが、彼等はそんな事をしないと
思う。

万一彼等が私達を不意打ちで殺したとしても、それは人間との全面

戦争となるから、彼等は私達に痛手を負わせる事は出来るかもしれないけれど勝てないだろうと思う。

それに、彼がそんな事をしないと信じられるのだから私は信じて決めてきたのだから。

集落の中に入り、周囲を観察してみる。

家の作り等は私達の居る場所よりは古いけれど、それでも100年前まで主流と言われていたぐらいの家屋の様式で始まりの村にこんな感覚を覚える。

「穏やかな村ですね」

私が答えると、彼は人間の私が見てもわかるぐらいの笑顔を浮かべて頷いた。

不覚にも見入ってしまったけれど、この兜をつけてる限りわからないだろうと思い、静かに心を落ち着かせる事にした。

反対派の2人は警戒を解いてはいないけれど、賛成派の2人は目をキラキラとさせて小さく歓声を上げたりしている、微笑ましく感じる。

そして、一際大きな建物へと案内されてその中へと入らせてもらう。建物の中はよく彼等特有の獣の臭いが仄かにしたが、それよりも近くの平野で取ったと思われる花達の匂いに驚いた。

それは嗅いだ事のないとてもやさしい匂いでとても落ち着いた気分になる事が出来たから。

中央のテーブルに両種族の代表者達が席に着くと私は先日国の者に言われた言葉を思い出した。

『会議場でも仮面を取らない者の虚言ではございませんか?』

兜が彼等の信頼の邪魔となるのなら取った方がいいのではないか。それと、彼に私の全てを知った上で信じてもらいたい。ただそう考えて口が自然と開いた。

「さて、話し合う前にこちらを取らせていただいてもよろしいでしょうか？」

辺りを見渡しながらそう言うと、彼と左側に座っていたコボルトが何かを周囲に伝えると途惑っては居たけれど頷いた。

私と一緒に来たメンバー達も驚いていたけれど、とりあえず兜を取る事にしよう。

一つ一つを丁寧に、そして金具に髪が引っかからない様に注意を払って取っていく。

そして、兜を脱いで、彼に視線を向けると目を見開いて驚いた表情を浮かべていたのが見えた。

それは、さっきまでの穏やかな表情とは全く違って何処か可愛らしいという印象を受けて苦笑してしまった。

「では、改めて自己紹介させていただきます。

ローザリアツハバーナと申します、現在メンバーでは3名居るSランクの1人をしています。

今回、このメンバーの代表となります。

では……他のメンバーの自己紹介もさせていただきます」

コボルト達に伝え、1人1人紹介していく。

左側に居る1匹のコボルトはたぶん先日話題になった人語を喋るコボルトなんだろうとわかった。

彼等の通訳を待ちながら紹介が終わると、白いコボルトの彼が申し

訳なさそうに目尻を下げた表情を浮かべる。

なんというか、とても可愛らしい……抱きついては駄目だろうか。

「私達には名前の文化がありません。

ただ、こちらが我が集落の族長をしているコボルトです、そして私は次期族長のコボルトです」

彼がそう言うと、反対派の1人が小声で「やはりコボルトは名前もない野蛮人か」ともう1人の反対派に呟いているのが聞こえた。ここが会議する場所であれば切り捨てている所だ。

もしかしたら彼にも聞こえたのではと思い、そちらに向くと、申し訳なさそうに此方を見ている。

嗚呼だからそんな視線を送ると抱き締めたくなってしまう。

ああ、今はそんな事を考えてる場合じゃない。

「こちらの者が申し訳ありません……ただ、やはり此方側とすれば、少々呼び名がないというのは困る事かと思えます」

反対派の態度に腹は立つけれど、名前が無いと言うのは不便に感じるので、この場だけでもそれを決めたかった。それに彼を名前で呼びたかった。

白い彼と隣の若干年老いた様に見えるコボルトが何か喋っている、もどかしさに囁かれてつい「どうしましたか？」と聞いてしまった。

「こちらにも名前の文化を取り入れましょうと話し合っていました」

と彼は答えてくれた。

人間側の我侔だと言うのに嫌な顔一つせず真剣に取り合ってくれる

彼は本当に素晴らしいと思う。

そして、コボルト達はワンやウオフと犬の様な声を出しながら喋っている、時折「ラファイ」や「キャプ……」等人間の言葉のような発声が聞こえるあたり名前なんだろうとわかる。

コボルトの言葉がわかるなら、このもどかしさは消えてくれるのだろうか。

程なくして、彼等の名前が聞こえたのか、私達に「お待たせしました」と答えて、紹介をしてくれた。

「長らくお待たせしてすいません、略称ではありますが、名前を決めさせていただきました。」

メンバーの皆様から見ただき、右手から、ブル、コリー、アキタ、ラファイ、キャプテン、セリリア、ジェバと名乗らせていただきます」

彼——ラファイがそう答える、通訳していたコボルトはセリリアと言うらしい。

名前を聞く限り女性とわかる、見る限りラファイと仲が良さそうで胸のあたりがモヤモヤとする、この感情はなんだろうか？

今、それを考えても埒が明かないのはわかっているし、和解を少しでも進める為に話を進めようと思う。

「わかりました、急遽決めさせてしまつてすいません。

では、本題に入らせていただきます。

まず、先日ラファイさんの言っていた、赤髪の姫と騎士の話ですが、貴方の仰ったアラフィルⅡアツハバーナという人物はアツハバーナ家には存在しないと言われています。

しかし、先代アツハバーナ家当主に確認を取った所、弟にその人物は確かに存在していると仰っておりました。

アラファイル・アッハバーナという人物を知る者は、本来ならば先代アッハバーナ家当主とそのご兄弟のみのはずです。

けれど、貴方はその事を知っていた……つまり、貴方は確かにアラファイル・アッハバーナという人物の記憶を受け継いでいるという事になる。

他の者はわかりませんが、私は信じるに価すると考えました」

そうラファイ達コボルトへ告げると、賛成派の2人は頷きあっている、彼等もこの話を信じてくれているんだろう。

「一つ質問をしてもいいでしょうか？」

「はい、答えられる事なら何なりと」

「アラファイルとフェティータの旅は何故そんなに有名になったのですか？」

考えるにアラファイル達が死んでからそんなに時間は経ってないと思いますガ」

彼が死んだ後、どういう経緯で有名になったのかは知らないという事なんだろう。

「ええ、確かに赤髪の姫が無くなったのは数十年前です、しかし：彼の旅路を歌う吟遊詩人が居まして。

その吟遊詩人が旅をしながら、騎士と姫の軌跡を歌いだし、その物語は広まりました。

当時のカリブス国王の手により、吟遊詩人は既に居ませんが、彼が歌った物語は数多くの吟遊詩人を産み、赤髪の姫と騎士の物語はカリブス王国だけでなく、現在人間が住む全ての土地で歌われる程にまでなりました」

「その吟遊詩人の名前ハ？」

「ええ、とても有名な人物ですから。

名はマギイ、マギイ＝レンバルトと言う人物です」

ラフィはその名前を聞いて何か考え込んでいると、心当たりがあったのだろう、何処か嬉しそうな表情を浮かべて頷いていた。

「ラフィさんの言葉を私は信頼しました」

口に出すまでもないのだけれど、この言葉は彼にではなく他のコボルトや周りのメンバーへ向けての言葉。

「さて、話を戻しますが、全メンバーは本日の会議を持ってコボルトとの和解をする事になりました。

今後は全メンバーは全コボルトとの戦闘行為を極力行わず、またコボルトの集落に移住したい者は移住させるという方針になりましたが、コボルトの皆様はその辺の事は大丈夫ですか？」

「ああ、移住の件も構わない、当分はコボルトの警戒心も強いままだと思うが、暴力沙汰等は起こさせない、起きた場合は嚴重な罪として扱おう」

「ありがとうございます、ただ……国としては、異種との和解は認めないの一点張りで……」

国の使者の者達の顔が浮かぶ、それだけである時の腹立たしさが浮かんでくる思いがした。

「王国の方針に対して、ギルドの対応ハ？」

「ギルドの方針はコボルトとの和解です、コボルトの皆様がよろしければ、ギルドの支部を集落の中に置かせていただきたいのですが」

「俺は構いません」

ラフィは即答で頷いてくれて、それに続いて通訳をしていると思われるセリーアと他のコボルトも続いて頷いてくれた。

「では、ギルド支部の建築ですが、10日後ここから南の村より建築の職人と、Sランクメンバーが1人とBランクメンバーが4人来る予定です」

「わかりました、何か他に決める事等がありますか？」

彼の言葉に少し考え込み、今日から何処で寝るかを決める事を忘れていた事を思い出した。

何故そんな事を忘れていたのだろうか私は……

「そうですね……今日より10日間、私と残り2名が集落に泊まりたいのですが」

たぶん賛成派の2人はここでの生活を知りたいと思っていると感じた。

彼等に視線を向けると、こちらを見ているが其処に嫌悪感等の悪感情はなさそうに感じた。

「わかりました、族長の家か私の家に3人泊まりますので、そちらでご相談ください」

その場の全員がラフィの言葉で頷きあい、解散する事となった。外に出て、他のメンバーと誰が泊まるかを決める事になる。といっても、話し合う程拗れる事もないのだけれど。

「ローザ様！　ありがとうございます！！」

「俺……コボルトと叩くのが辛くて……見てるとウチの犬が浮かぶんです。」

彼等と和解できて本当によかった……」

彼等は嬉しそうに笑顔が浮かべていた、私も彼等と同じで嬉しかったので無意識に笑顔が浮かんでいた。

「それで、私と彼等2人がコボルト集落に滞在でいいかな？」

「ええ、構いません。では私はギルドマスターへと伝える事がありますので、これで」

「ああ、道中気をつけて、間違っても嘘の報告はするなよ」

「ッ……！　わかっております」

反対派だった2人はその日のうちにギルド本部へと戻っていった、何も問題が起きなければいいのだけれど。

他の2人はコボルトの族長らしい人の家へと泊まる事になり。私は是非ともラフィの所で滞在したいと希望を出した。出来る事ならば一緒に居たいと思ってしまった。

人間とコボルトでは結婚等出来ないかもしれないけれど、今の感情に嘘をつきたくなかったから。

その道中、ラフィと両種族について話をしていた。

「確かに、人間とコボルトの生活はそこまで変わらないのでしょう。私達は人間の生活を模倣して生きてきましたかウ」

「なるほど……しかし、この集落の形はすごいとしか言えませんね。要塞都市ケファラスに告ぐ堅牢さではないでしょうか」

そう、街の中の建物事態は昔の建物の印象を受けたけれど、案内してもらった場所は何処も素晴らしい技術が使われていた。カリブス国にもない技術。

深い堀はそれだけで攻める人間の心を折る、あれだけで攻めたくないと思わせる作りだと思った。

そして、聞くに更にそこには水を敷き詰めて侵入を更に難しくする予定だと言うのだから驚きに驚きを重ねてしまって、ラフィに笑われてしまった……恥ずかしい。

「ええ、人間が攻めてきた時に少しでも抵抗できるようにと、皆で考え作りましたかウ。

ただそれが無駄になったので、内心安心しています」

「安……心……ですか？」

「コボルトは人間には勝てませんかウ。

結局は徹底抗戦をしても滅びるだけだったでしょう」

彼はわかっていたんだ。

人間と全面戦争になったらどうなったか、そしてお互いの繁栄を願

った。

「……そうですね、人間も多くの被害が出なくて良かったと思います。

それに、私達人間はコボルトとも生きていけるとわかりましたから」

彼が居るのならば、人間とコボルトは共に生きていける、私はそう感じた。

ローザⅡアツハバーナ4

コボルト達と共に暮らし始めてから新しい発見だらけの生活に満足している。

彼等の狩猟はとてもタメになり、それは人間の新しい文化となると思う、それに彼等が作った堀や柵は今後の街づくりを多いに進歩させる技術だと思う。

此方に移住してきた職人の人達は感動のあまりラフィ達を拝んでいたものだ。

それに慌てふためいていたラフィは普段の凛々しい顔つきはどこへいったのかとても可愛らしく映った。

それに、コボルト達はメンバーにとってBランクに上がるための踏み台のようにしか考えられていなかったけれど、この集落のコボルト達の戦闘能力は見張るものがあつた。

ラフィを初め、彼を取り巻くコボルト達はAランクのメンバーにも引けを取らない程の強さだったし、ラフィに到ってはナンバー2と言われる腕のSランクメンバーを倒していた。

全面戦争になっていたらと思うと背筋に寒いものが過ぎったけれど、現実には彼等との共存、本当に良かったと思つた。

彼もメンバーとなつて私と一緒に集落を守って生きたいと思つたけれど、彼はこの集落の長となつたため、それは叶わなかつた。

彼はこの集落の皆を守る人なのだからしょうがないと思うけれど、時折過ぎるこの切なさなんなんだろう。

それに、ラフィは基本的にとっても優しく、その辺の人間とは比べる事も出来ない程の紳士ぶりで、その対応になれてない私は度々赤面しているのだけど、彼は気付いているのだろうか？

何故か私にだけ挨拶する度額に口付けしてくるのだけれど、一体どういう理由があるのかはわからなかった。

人語がわかるセリフに聞いてもみたのだけれど。

「まあ、あの人が？　フッフ良い事聞いちゃった」

とだけ意味深な笑顔を浮かべて去って行ってしまった。

もしかしたら、何か儀式めいた事なのかもしれないと考え、一瞬だけ求婚という言葉が浮かんだけれど、それはありえないと思いを振り払った。

だって、彼と私は種族が違うのだから、嬉しくないかと聞かれたら嬉しいと答えるし、たぶん私は泣いて喜ぶんじゃないかなと思うけれど……

そうじゃなくて、彼はとても優しいのだ、何かある毎に「不便事はないですか」とか「コボルト達が不快な行動をしていませんか」とか「何時も大変なのですから時には休んでもいいと思いますよ」とか常に気配りが出来て、コボルトの人達だけでなく、最近移住している人達からも慕われ始めている。

彼が人間だったらと何度思った事だろうか。

けど、私の悩みは全て杞憂だったのだと後になってわかった。

結果的に言ってしまうえば私とラフィはお互い想いあっていたし、事実結ばれた。

経緯は言いたくないので詳細は省くけれど、歴史を研究していたカリブス国の学者が言っていた、彼の有名なレギン・カリブスという人物。

その生まれ変わりだと名乗る人が私達を強引と言うべき手法で結ばせた。

それ自体には感謝しているが、彼等が言うには私もその時代に生きていたという事を聞いた。

そして、前世のラフィと夫婦だったと聞かされた時は顔から火が噴出しそうなくらい恥ずかしかった。

前世でも夫婦だったからなのだろうか、私が彼に惹かれるのは……最初はそうだったのかもしれない、けど、彼に惹かれてるのはそれだけじゃないと私は言える。

前世は前世だし、今は目の前に居るコボルト族のラフィを私は愛しているのだから。

そう、誰がなんと言おうとも、私はラフィを誰よりも愛している。彼が居なければ私は存在できないと自信をもって言える程に

結婚して、行為を続けた時は彼との子供が本当に授かる事が出来るのかという不安はあった。

けれど、それは程なくして解消された。

ラフィとの間に生まれた子供を抱いて、私はとても安心する事が出来た。

彼との子供はコボルトの特徴を所々に受け継いだ、新しい人種と言うべき姿をしていた。

生まれた時は目も開かず、産声は何処か犬が甘えるように「クウ〜ン」という泣き声だったのを覚えている。

それも今は1年前の事、私の記憶が正しければ、生後1年はまだ喋る事も満足に出来ず、1人ではほとんどの事が出来なかったと思うけど、私とラフィの間に生まれたこの子はとても早熟な子だった。生まれて1年もすると、人間の子供達と一緒に外で遊びまわり、日々元気に過ごしていた。

ラフィから譲り受けたと思える色をした頭髮。白銀色の様に光を反

射し、とても美しく輝いていた。顔立ちは野性味のあり、親の私から見ても将来はとても格好よくなると思う。

それと、時折見せる表情は何処かラファイが人間だったらこんな感じかな？　と思わせ、ドキッとさせられた。

そんな幸せな日々を噛み締めて過ごしている中、エルドマド帝国内である新種の食べ物が発見された。

その名前はネルギという名前で呼ばれていて、とても歯応えがあり、焼くと甘くておいしいらしい。

機会があれば皆で食べたいねという話をラファイ達としたのを覚えている。

そのネルギはある日、エルドマド帝国とコボルト集落内で貿易している商人が馬車の荷台いっぱい運んできた。

私とラファイの2人は久しぶりの休日を2人で満喫していた。

他の土地から持ってくる色々な品物を見ると、商人がこのネルギを紹介してくれたのだ。

ラファイはとても喜んで、大量に買っていたし、私もどんな味がするのか楽しみだった。

けれど……ネルギを購入して3日目の夜にラファイがとても苦しそうなうめき声を上げていた。

上半身を起こして、ラファイにどうしたのかと聞いても返事がなく、ただ苦しそうにもがき苦しんでいた。

どうしたのだろうと眺めていると、突然ラファイは吐しゃ物を撒き散らした。

「ラファイ、大丈夫？　どうしたの！？」

私は突然の異変に驚いて、彼にそう聞いたけれど返事は何もしてくれない、突然どうしたのかと心配し、ここを離れて助けを求めるべきか、彼と一緒に居るべきが悩んでいると、息子のアルクが騒ぎが気になって起き出して来た。

ラフィの苦しんでいるのを見て、アルク自身も心配そうな表情を浮かべていた、ここで私までもが混乱してはダメと瞬時に考えいると。

「アル…ク…、レギンを…呼ん…で来い」

と息も絶え絶えになって伝えていた。

それでもアルクは行動に移せない様だったから、私も少し声を大きめに「早く」と伝えて、彼の背中をさする。

レギンが血相を変えて現れたのは、アルクが家を出てから然程時間もかからなかった。

「ラフィ!? うん…え!? ……ラ、ラフィ…ごめん、確認のため灯りをつけるよ」

フィゾーさんは、近くのテーブルに置いてあった蠟燭に火をつけてから、ラフィの姿を照らす。

そして、彼の姿を見て私は絶句した。

彼の白い体毛に覆われた体は見る影もなく、所々に黄色い斑点が出来ていた。

「毒……? いったい誰が!？」

私がそう叫びフィゾーさんへと視線を向けるけれど、フィゾーさんは困ったような表情を浮かべて彼に話かけていた。

それから間もなくして、ラフィの意識は無くなり、それから起きる事は無かった。

幸せを感じていた直後に彼を失った心はとても痛く、あるべきものがない喪失感に襲われた。

何時も一緒に寝ていた寝台に彼の温もりは無く、彼の匂いも日に日に薄らいでいく。

彼にもう会えない、その事実が日々私を蝕んでいくのがわかった。

息子のアルクを始め。フィゾーさんや、その妻であるセリーアさんも毎日心配そうに私に気を使ってくれるけれど、私はちゃんとした返事が出来なかったと思う。

そんな悲しみに暮れる日々を過ごしていたある日、コボルトがラフイと同じ症状で亡くなるのが相次いだ。

そして、わかった結論は……ネルギの毒。

その毒は人間やアルクのような混血種には無害だけれど、コボルトには有害だったみたいだ。

コボルトの中には死に至らしめる程の症状が出ない者も居たけれど、数割の確率で死に至るコボルトもいた。

たった一口食べただけで嘔吐する者。

1食ぐらいならば何も問題のない者

そして、ラファイのように時間が空いた後にもがき苦しみ死に至る者。

知らないにしても、彼を死に追いやったのは私だ。

フィゾーや他の人達は私のせいではないと言ったけれど。

事実私が殺した様なものだ……私が彼に食べさせたから、彼はもがき苦しんで……最後に死んでしまった。

一生を共に暮らしていこうと思っていたのに、私が……私が！

気付いたら私は、暗い空間の中に居た。

どうしてここに居るのか、ここがどこなのか、それすらわからない。

「可哀想な子、魂がそんなになるまで傷ついて、たった一度の人生じゃそうはならないわね。

本来なら、アレの世界に干渉してはいけないという決まりだけけど、アレと私の関係だから然程問題はないでしょう。

それに、私も貴女達が気に入ったわ」

何時の間にか目の前に居た女性はそう呟くと、私の頭に手を載せた。その手は淡く輝いて、私の身体を照らす。

「さあ、行きなさい。

そして、また会いましょう」

女性は最後に笑うと、私の意識は遠く離れていった。

もう、あんな悲しみは追いたくない、それにあの人に辛い思いはさせたくない。

一層の事、彼に近づかず私は暮らさないといけない。

そして、私の意識は完全に消えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8827r/>

転生ルーレット番外編

2011年6月18日00時35分発行